

## 弘大、30年ぶり総合調査

# 白神の環境刻々変化

ニホンジカやイノシシの出没、南方系の昆虫の発見、植物の減少・増加。二三十年を振り返っても、白神山地の世界遺産地域や周辺地域では、昔は見られなかった現象が相次いでいる。約30年ぶりとなる白神山地の本格的な生態データの収集に、弘前大学の白神自然環境研究センターが取り組むのは、刻々と変化する白神の自然環境を長い時間軸で捉える際、どのタイミングでどう変わっていったのかを見極める材料を増やす狙いがある。

(高松拓輝) 【本記1面】

## 山岸准教授「詳細データ残したい」

同センターの山岸洋真准教授(植物分類学)によると、白神山地の最高峰・向白神岳(向白神)周辺ではここ数年で高山植物の分布に変化が見られるという。やぶが多く無雪期はほとんど登山者が入らない場所。「人によるインパクトが少ない場所なのに大幅な変化がある。地球温暖化の影響が大きい」と指摘する。

国連教育科学文化機関(ユネスコ)は、白神の普遍的な価値を、かつて北日本を覆っていたブナ林が原



弘大が重点調査地と位置づける「白神の森 遊山道」。過度に観光地化されておらず、白神山地核心部同様の森林景観があることから調査地点に選んだという＝2022年10月、鱒ヶ沢町

始性の高い状態で残っている点に加え、冷温帯生態系のモニタリングの場としても重要だと評価している。

人の出入りが頻繁にあるような里山の自然環境に大きな変化があった場合、それが人によるものなのか、気候変動によるものなのか、正確に判断することは難しい。他の里山に比べて、人の影響が少ない白神の遺産

地域周辺は、自然環境の変化を検証するための重要な場所とされる。山岸准教授は「例えばGPS(衛星利用測位システム)など、30年前の調査では使えなかった技術が今は使える。より詳細なデータを残したい」と話した。

上記の画像は、当該ページに限って”東奥日報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。